ゼミにおける発表者の応答表現について研究
-日本国内の大学の「ゼミ」における談話分析-

S17（漢字表記）

「要旨」本稿では高等教育において行われているゼミにおける発表を研究対象として、発表者が使う応答表現を分析し、三種類の応答表現を定義した。単純応答、反復応答と飛躍応答である。また、発話者が学生同士である場合と発話者が先生である場合、発表者の使う応答表現が顕著な異なりがあるということは明らかになった。

「キーワード」ゼミ　応答表現　単純応答　反復応答　飛躍応答

１はじめに

近年、日本にゼミ（ゼミナールの略称）という高等教育において行われた授業科目が注目されている。ゼミは担当教員の指導のもとで、少数の学生がある特定なテーマに関する討論、検討、研究などを行う教育方法としており、留学生教育に用いることもある。しかし、留学生を対象としてのゼミも設けられているが、実は、留学生の大多数にとっては日本語の語力が中級または上級であっても、ゼミの内容を十分に理解するのが非常に困難である。したがって、ゼミを最大限に留学生教育に利用するために、学部生と大学院生に向けたゼミの活動を分析し、分析の結果から抜粋した点を留学生教育に応用し、その教育方法を改善することは今グロバーリズムの背景での高等教育に非常に重要なことであると思われる。

大学ゼミの活動への研究においてそれぞれの分野がある。ゼミ発表の質疑応答にある応答表現は自然的な表現であり、なければならないとわかるが、ゼミ発表で発表者はどのような応答表現を使うのだろうか。

そこで、本稿では大学院のゼミの談話を分析し、特に応答表現という点について、発表者の使っている応答表現について議論したいと思う。

２先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話において応答表現について、既に多くの研究が出されている。

一般的は、質問者が応答者より会話への主導性があり、応答者は聞かれた質問や意見などできるだけ応答する以外何もできず、対話構造の力になれないという見方がある。しかし、会話は両方が話し合い、質問者が応答者とともに協力して対話を構造し、つまり両方も対話を主導することができることが多い。堀口（1997）は、会話における聞き手の役割を分類し、示している。そこでは、「会話において、聞き手は、話し手と同じように重要な役割を担っているのであり、その役割は話し手が会話において果たす役割と同等に評価されるべきである」と述べている。特にゼミで発表をする際、発表担当者は多くの時間に応答者つまり聞き手としており、質問者からの質問を回答しながら、発表を推進することがよくみられる。この点について、吉田（2009）次のような指摘をしている。

応答者による応答内容の選択によって、質問表現が使用された会話が構造的に促進する（維持される）という現象をとらえることができ、質問表現を分析する上で、応答者の発話の重要性を指摘することができる。

また、質問者と応答者が同じ情報をシェアする場合、応答者は質問者からの多義性を持つ質問を受け、後続する会話構造に工夫することができて、発話連鎖の飛躍がもたらされる。これに関し、吉田（2009）は、「発話の連鎖に飛躍がある現象は、共通の経験や知識が多い親しい間柄の会話に特徴的であると考えられるが、連鎖が飛躍したり、指示対象が推移したりしながら会話が進行することで、より内容が先取られた展開の速い会話へと繋がると考えられる」と述べている。

しかしながら、筆者は発話の連鎖に飛躍がある現象は親しい間柄の会話の特徴だけでなく、話し手と聞き手が共通の情報がシェアすれば、そういう飛躍が現れると思う。ゼミで発表するとき、前に配られた資料と講義を共通の情報とし、発表担当者は質問を聞き、質問がまだ終わらない際に相手のわからない点を推測して相手の話を接続して応答することができる。発表者の応答はその飛躍を保障することである。平本毅（2011）によると、相手を理解したことに基づいて、自分の見解や態度を提示するためには基本形式が一つある。その基本形式は次のとおりである。

［①「私事語り」→ ②「わかる」を含む文（①への理解の〈主張〉）→ ③①への理解の〈立証〉の試み（であると同時に②の「理由の説明」）→ ④①の語り手による、③への〈受け入れ〉］。

実際にゼミ発表の場合は、こういう形式をよく見られる。一般的には、この形式の②③④は聞き手あるいは発表者の応答という形で表現する。その状況で、発表する途中に出てくるその応答は聞き手が自分の質問が理解されると感じることを保障するにとどまらず、その結果、質問者が自分の質問への説明にかかる時間が少なくなり、発表の全体的に発表を推進することもできるだろう。

３研究の資料と分析の方法

会話資料としてのは、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話二つを文字化したものである。一つ目は日本語学習者を対象として、日本語でレポートを書くことについての調査の分析方法への質疑応答である。二つ目は日本語学習者と韓国語学習者を対象にし、絵本多読の効果を調べる発表を文字化資料である。その文字化データから応答表現の視点からデータを抽出し、二つの資料を分別に応答表現とゼミ発表を推進することとの関係によって分析を行う。

４分析の結果

本稿の分析では、発話者の発話が終わる際に使われた発話文型、つまり「平述文」、「未完文」、「質問文」という三つの文型によって、発表者の応答が違うということが分かった。ゼミ発表で発表者に使われた応答表現は三種類があり、**「反復応答」**、**「単純応答」**と**「飛躍応答」**である。

「反復応答」というのは、発話者の発話から出てきたキーワードや文など、自分の応答に引用して話すことである。簡単に例を挙げる。

質問者:この属性の中に、その、日本語のレポート書いたことある人とない人といる↑

発表者:あ、レポート。

以上の例が示した通り、発表者が「レポート」というキーワードを反復して話したのは「反復応答」と本稿で定義した。

「単純応答」というのは、「そうですか」、「はい」や「わかりました」などの発話者の応答がいらない応答表現である。例は以下になる。

質問者:それでしたら、内容じゃなくて、日本語力にやっぱり関係があるんじゃないかと思います。

発表者:はい。そうですね、

「飛躍応答」というのは、聞き手が話し手の質問がまだ終わらないうちに、話し手の聞きたいことを推測し、その推測によって応答することである。以下の例で説明する。

質問者:で、あ、基本的にはあのー、作品としては翻訳ものではなくて、日本人作家が書いたもの、

発表者:あ、翻訳混ざってます。

この会話で、発表者は質問者の聞きたいことを推測してから答えを出した。こういう飛躍的な応答表現は「飛躍応答」と定義した。

本稿では、資料 A と B を分別にデータを統計して分析した。

単に資料 A をまとめてみると、発表者の応答表現が合計で 56 箇所がある。この中、学生同士への応答は 48、先生への応答は 8 がある。

表 1

発話文型 応答種類	平述文	未完文	疑問文
単純応答	61.9%	25.0%	37.5%
反復応答	14.3%	—	12.5%
飛躍応答	23.8%	75.0%	50.0%
比例	43.8%	22.9%	33.3%

表 2

発話文型 応答種類	平述文	未完文	疑問文

単純応答	71.4%	—	50.0%
反復応答	—	—	—
飛躍応答	28.6%	—	50.0%
比例	75.0%	—	25.0%

表 1 が示したように、学生同士の質問者が発話した際に、最もよく使った文型は平述文であり、次は質問文、最後は未完文であることが明らかになった。平述文を応答した場合は、単純応答の比例が最も高く、61.9%に至っている。質問文は飛躍応答の比例が 50.0%、半分を占めている。未完文の場合は飛躍応答が全部の応答表現の四分の三を占めた一方で、反復応答がないことが分かった。

表 2 は先生と対話した使った反応表現のデータである。学生同士の発話と違い、先生が発話したとき未完文を使わなかった。発話文型の平述文に対する応答種類の中で、比例の最も高いのも単純応答であり、質問文の場合は飛躍応答と単純応答が同じ比例で、50%であることが分かった。

資料 B のデータは表 3 と表 4 で説明する。資料 B に発表者の応答表現は合わせて 51 箇所があり、学生同士との対話は 43、先生との対話は 8 である。

表 3

発話文型 応答種類	平述文	未完文	疑問文
単純応答	55.6%	0%	63.6%
反復応答	11.1%	21.4%	27.3%
飛躍応答	33.3%	78.6%	9.1%
比例	41.9%	32.5%	25.6%

表 4

発話文型 応答種類	平述文	未完文	疑問文

単純応答	100%	—	100%
反復応答	0%	—	0%
飛躍応答	0%	—	0%
比例	87.5%	—	12.5%

表 3 には、学生同士の質問者が平述文を最も常に使い、次は質未完文、最後は質問文である。平述文の応答は単純応答の比例が 55.6%、飛躍応答が 33.3%であることが明確になった。未完文の応答は飛躍応答の比例が明らかに高く、78.6%に達している。未完文の場合とは違い、質問文の応答は単純応答の比例が 63.6%であり、飛躍応答の比例は僅か 9.1%であることが分かった。

表 4 が示しているのは先生と対話した場合のデータである。先生は平述文の使用頻度が質問文より高く、未完文を使用しなかった。発表者は先生の発話を応答したとき、単純応答しか使わなかったことが明らかになった。

資料 A と資料 B をまとめてみると、共通点が多くあることが分かった。

発話者が学生同士である場合は、主に以下の四つの共通点がある。

1、 発話者は平述文の使用頻度が最も高い。
2、 発表者は平述文を応答したとき、単純応答を最もよく使った。
3、 発表者は未完文を応答したとき、飛躍応答を最もよく使った。
4、 発表者は質問文を応答したとき、単純応答の使用頻度が高い。
5、 発表者は学生同士の発話を応答したとき、単純応答の使用頻度が高いが、反復応答と飛躍応答の使用頻度が先生の発話を応答したときより著しく高かった。

発話者が先生である場合は、主に以下の三つの共通点がある。

1、 先生は平述文の使用頻度が高く、未完文を使わなかった。
2、 発表者は平述文を応答したとき、単純応答を最もよく使った。
3、 発表者は質問文を応答したとき、単純応答の使用頻度が高い。
4、 発表者は先生の発話を応答したとき、単純応答の使用頻度が高い。

以上の共通点を基づき、ゼミで発表するとき、筆者は「単純応答」が会話を進められるそれなりの非常に重要な役を担っていると思っている。「単純応答」は聞き手が話し手の言ったことがわかるという意味を含め、「単純応答」という形で話し手にこの意味を伝えられる。先生の発話を応答した場合、単純応答の高い使用頻度から推測すれば、「単純応答」は発話者を尊敬する意味も含

めるかもしれない。学生同士が話し合う場合は、上下関係がないので、「飛躍応答」と「反復応答」適当に使えば発表を活発化にすることができることが分かった。

「参考資料」

吉田睦(2009)「会話内の質問表現が持つ多義性　－応答表現から見る会話構築を中心に－」『つくば応用言語学研究』16 号　pp. 87-97
平本毅(2011)「他者を『わかる』やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62 号　pp. 153-171
堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお　p. 157